

アイルランド人軍医の見た日本

—ある捕虜の日記

小村 志保

第二次世界大戦中の終結から75年目となったこの夏、各国で様々な記念行事や報道があった。アイルランドで話題となったのは、この大戦中に日本軍の捕虜となり、その間秘かに毎日日記を書き続けていたアイルランド出身の軍医である。この軍医フランク・マレー (Francis Joseph Murray, 1912-1993) は英国陸軍に所属し、1942年2月のシンガポール陥落以降約3年半の間日本軍の捕虜となっていた。シンガポールのチャンギ収容所、そして日本国内では北海道の捕虜収容所に収容されながらも終戦まで生き延び、その間書き続けていた日記がこの夏公開されると、その内容の豊かさとともに、一部がアイルランドの公用語であるゲール語 (アイルランド語) でつぶられていたこと、またカトリック教徒で「ナショナリスト」(アイルランド社会ではアイルランドの南北統一を目指す人、また自身のアイデンティティーが英国人ではなくアイルランド人である人を意味する) であるマレー氏が英国軍人として捕虜となっていたことなどから多くの関心呼んだ。またこの日記は終戦後にマレー氏の妻となる女性に宛てた形式でつぶられており、収容所生活という過酷な状況にもかかわらず愛情に満ちたものでもあった¹⁾。

本稿ではこの日記を公開したマレー氏のご子息カール・マレー氏の承諾を得て、その一部を翻訳して掲載する。第二次大戦中、日本が国内外に施設を作って兵士や民間人を収容し、多くの場合それらが劣悪な環境にあった事実は、今日の日本ではあまりにも知られていない。本稿によりこの事実の一端がより多くの方々に届くことを願う²⁾。

1. 略歴

フランク・マレー氏は1912年、現在の北アイルランドの首都ベルファストで生まれた。当時はまだアイルランドの南北分轄前である。地元の学校で教育を受けた後、ベルファストにあるクィーンズ大学 (Queen's University) の医学部を卒業して医師になった。

¹⁾ <https://www.rte.ie/brainstorm/2020/0901/1162470-frank-murray-belfast-doctor-gaeilge-japanese-second-world-war-pow/>; <https://www.irishtimes.com/opinion/how-a-belfast-prisoner-of-war-used-irish-language-to-defy-japanese-captors-1.4345011>; <https://www.bbc.com/news/uk-northern-ireland-53757121> (最終閲覧日2020年11月3日、以下に引用する全てのサイトも同じ)

²⁾ My deepest gratitude to Carl Murray.

ベルファストで研修医として働いた後、イングランド、バーミンガムの開業医で働いた。1939年9月ドイツがポーランドに侵攻してヨーロッパで第二次世界大戦が始まると、マレー氏は英国軍に入隊を希望する。この時までにはアイルランドは南北に分轄されており、マレー氏の出生地ベルファストは、アイルランド南部に新たに成立したアイルランド共和国ではなく、英国領北アイルランド地域となっていた。マレー氏は医師だったため正規軍ではなく陸軍医療部に将校として入隊することを勧められ、1939年12月医療部に入隊した。1940年2月にはインドへ派遣され、1941年にはマレー半島に移動、1942年1月には移動救急隊所属の少佐となり、シンガポールへと更に移動する。翌2月、シンガポールの英国軍は日本軍に降伏、この時多数の英国軍兵士が日本軍の捕虜となり、マレー氏もその一人だった。

2. アイルランドと二度の世界大戦

世界が二度の世界大戦を経験した期間、アイルランドは「革命期 (Revolutionary Period)」と呼ばれる時期を迎えていた。1910年代から20年代を「革命期」と呼ぶのだが、この間にアイルランド島は分割され、現在の南北アイルランドが形成された。国の体制が変化したため、2度の世界大戦中のアイルランドと英国軍との関係は複雑になった。全島が英国の一部であった第一次大戦時には約21万人の男性が英国軍に入隊し、3万5千人程が戦死したとされている。アイルランドには徴兵制度が適用されなかったため多くが志願兵だった。彼らは家族の伝統や冒険心、経済的な理由など様々な理由で志願した。概してプロテスタント教徒の場合は英国の戦争に協力することに抵抗が少なかったが、既に活発化していたアイルランドの自治や独立を目指す運動に賛同することの多いカトリック教徒にとって英国に協力することは容易ではなく、批判されることもあった。

第二次大戦時には南部アイルランドはエール/アイルランドとして既に独立しており、大戦には中立の立場を表明していたため国としては参戦していない。一方北アイルランドは英国の一部であったものの徴兵制度が適用されず、志願兵約3万8千人（うち女性が約7千人）が英国軍に入隊した。また南部アイルランドからも英国軍に入隊でき、男女合わせて4万3千人以上が志願して入隊したとみられる。当時入隊した人々の政治的宗教的背景は様々で、アイルランド国内での宗派対立や英国への帰属をめぐる対立を必ずしも反映していない。こうした対立が鮮明化するのには20世紀後半、特に北アイルランド紛争が激化して以降の傾向と考えられる³⁾。第二次大戦中に南北アイルランドで最も差が現れたのは市民生活だった。北アイルランドは連合国側の地域として、英国本土と同様の経験をした。増税、行動制限、配給、そしてベルファストでは空襲もあった。北アイルランド領内では英国軍の訓練が行われ、新しい飛行場も建設された。1942年には米軍

³⁾ Keith Jeffery, 'The British Army and Ireland since 1922', in Thomas Bartlett and Keith Jeffery, eds., *A Military History of Ireland*, (Cambridge, Cambridge University Press, 1997, first published in 1996), pp.431-58.

が領内に駐留した⁴⁾。

日本が第二次大戦に参戦した太平洋戦争開戦時、日本にいた民間外国人はそれぞれの国籍によって「敵性外国人」か否かを判断された。「敵性外国人」とみなされた場合には強制収容されたが、この時期日本にいたアイルランド出身者は母国で起きた変化による影響を受けている。別の機会に記したが、たとえば日本国内のカトリック教会に所属していたアイルランド出身の修道女は、明治時代に日本に入国していたため国籍または旅券が英国のままであり、開戦時には「敵性外国人」として収容されている。その後中立国のアイルランド出身であると証明されて収容を解かれるまで約3年かかった⁵⁾。しかし兵士の場合にはアイルランド出身であっても連合軍側の兵士として扱われるため、中立国アイルランドの出身であることによる特別な扱いはなかった⁶⁾。

フランク・マレー氏がなぜ入隊したのかについては、家族にもはっきりとわからないとのことである。「ナチスドイツの拡大に不安を抱き、ナチスがアイルランドにも容易に侵攻するのではないかと考え、「北部のカトリック教徒として役割を果たしたい」と思ったのではないかとのことである。本当はヨーロッパ戦線の「フランスに行きたかったのではないかと思うが、インド、マレー半島、最後には日本に行くことになった」そうだ⁷⁾。

マレー氏がゲール語を本格的に学ぶことになったのは1929年、16歳の夏である。奨学金を得てドニゴール (Donegal) 州ラナファスト (Ranafast/Rann na Feirste) にあるゲール語学校に夏休暇の間通うことになったのだ。アイルランドにはゲール語で生活する住民の割合が多いゲールタハト (Gaeltacht) と呼ばれる地域があり、自治権を獲得した後には法律でゲールタハト地域が定められた。こうした地域では今日でも夏休みの間、国内の他地域から児童生徒たちが国内留学のような形でゲール語を学ぶために滞在する。マレー氏もそのような一人だった。ここでマレー氏は同じくゲール語を学ぶために来ていた将来の妻アイリーン・オケイン (Eileen O'Kane) と出会っている。アイリーンはマレー氏と同年で、また同じくカトリック教徒でもあり「ナショナリスト」の家庭で育っていた。この後二人ともクィーンズ大学に通い、マレー氏は医師、アイリーンは教師となった。卒業後しばらく交際が途絶えたが、1941年7月に婚約している。この時マレー氏は既に東南アジアに駐留していたため、アイリーンは電報を送って婚約を承諾した。二人が再開するのは終戦後の1945年11月である。

⁴⁾ J. L. McCracken, 'Northern Ireland: 1921-66', in T. W. Moody and F. X. Martin, eds., *A Course of Irish History*, (Maryland, Roberts Rinehart, 2002, 4th edn.), pp. 262-71.

⁵⁾ 拙稿 'Kit MacSwiney: An Irish Nun's Life in Japan', 『学習院女子大学紀要』(第19号、2017) pp.11-23.

⁶⁾ 内地の収容所では終戦時名古屋1、仙台4、大阪3の合計8名の捕虜がアイルランド国籍と記録されているがどの軍に所属していたのかは不明。茶園義男編『大日本帝国内地俘虜収容所』(不二出版、1986) pp.21-2.

⁷⁾ 注1に同じ。

3. 太平洋戦争中の捕虜収容所

日本は日露戦争と第一次大戦時に国内で捕虜収容を行ったが、太平洋戦争開戦後の捕虜収容は、その数の多さのため全く違う経験となった。開戦直後から連合国軍兵士が投降して大量の捕虜が発生すると1941年12月に俘虜情報局が陸軍省外局として開設され、翌年1月に最初の捕虜収容所が現在の香川県善通寺市に開設された。その後の捕虜急増を受けて1942年3月には陸軍省俘虜管理部が設置されるがこれはそれまでの戦争では設置されなかったものである。捕虜数が膨大となり、その取扱いに専念する機関が必要であると認識されたための措置だった。この年4月にはそれまで仮収容所だったマニラ、シンガポール収容所が正規の収容所となり、結局終戦までに外地には朝鮮、奉天、上海、台湾、香港、タイ、フィリピン、マレー、ボルネオ、ジャワの各地に収容所が設置された。また内地では「本所」と呼ばれた捕虜収容所が1942年9月以降東京、大阪、函館、福岡に開設され、終戦間際の1945年4月には仙台、名古屋、広島にも開設された。これら「本所」の傘下に分所、派遣所、分遣所などのいわば支所が設置され、終戦時には内外地を合わせて214か所程度あったと考えられる。これらの収容所で最大30から35万人を収容していたと推定されている⁸⁾。

これらの収容所の運営や捕虜の管理については1941年12月23日発令の「俘虜収容所令」(明治38年制定の俘虜収容所条例の改正)を最初に、終戦までの間に基本法令は陸海軍合わせて17件が新規制定か改正、通牒85件が発せられており、戦況の変化に伴って「なし崩し的に国際法が無視されていくことに」⁹⁾なった。また1929年の「捕虜の待遇に関する条約」(ジュネーヴ条約)に日本は調印したものの陸海軍の反対によって批准しておらず、1942年7月には陸軍省での訓示で捕虜には「一日と雖も無為徒食せしむることなく、其の労力、特技を我が生産拡大に活用する」よう東条英機陸軍大臣が訓示するに至って、「国際法軽視と国内法優先」¹⁰⁾の傾向に傾くこととなった¹¹⁾。

マレー氏の捕虜日記は婚約者アイリーンに宛てた形式で書かれ、シンガポールで日本軍が勝利した1942年2月15日に始まる。シンガポール陥落後、民間人約3千人はチャング刑務所に、連合国軍兵士約5万人はこの刑務所付近にあった英国軍兵舎セララン兵営(Selarang Barracks)に収容された。息子カール・マレー氏が認めているように、婚約者に宛てて書いていたため「収容所で見た残酷なことは書いていない」がそれでも捕虜生活の過酷さや当時の日本社会の様相をもうかがえる内容である。またカール氏は「父が持っていた母への愛情と強い信仰心のおかげで生存できた」と語っているが、日記を読み進めるとこれらに加えて医師としての使命感も生存への重要な要素だったと思わ

⁸⁾ 白戸仁康『北海道の捕虜収容所もうひとつの戦争責任』(北海道新聞、2008)、立川京一「日本の捕虜取扱いの背景と方針」『戦争史研究国際フォーラム報告書』(第6回、防衛省、2008) pp.74-100.

⁹⁾ 白戸、前掲、p.20.

¹⁰⁾ 立川、「日本」、p.83.

¹¹⁾ 詳しくは茶園義男編『俘虜情報局・俘虜取扱いの記録』(不二出版、1992)

れてくる。なお1941年2月から翌年1月まではインドとマレー半島から詳細な手紙をアイリーンに送っているが、今回は日本軍の捕虜となって以降の日記のみを取り上げ、その一部を翻訳する¹²⁾。

4. 1942年2月～1943年5月、シンガポール

1942年2月15日 日曜 シンガポール

ついに全てが終わった。僕たちは日本に無条件で降伏した。この数時間は地獄だった。・・・私は戦争捕虜となりこれから自分に何が起るのかと考えている。どこへ送られて何が起るのか私にはわからない。

19日には「日本軍の戦車の行列」を目撃、翌日には正式に捕虜となる時が来たことを記している。

1942年2月20日 金曜

ついに僕が戦争捕虜となる時が来た。明日早朝部隊の先頭に立って14マイル先の収容所へと行進しなければならない。救急隊に残ることもできたが仲間と一緒にいたかった。今日は移動の準備をした。私物が全部盗まれた。大学時代のブレザー、私服のシャツやガウン全部。ありがたいことに十字架とキリスト像はまだ持っている。

1942年2月21日 土曜

長く消耗させる行進が終わった・・・ダーリン、僕は死ぬまでこの行進のことを忘れない。僕は体調がよく十分行進できる状態だった・・・ここに着いた時僕たちは疲れ果てていた。でも一日中完璧に列を保ったし、よろめく者もいなかった（これは例外）。

翌日、捕虜となって初めての日曜を迎え、ミサへの言及がある。日曜にミサを受けられるか否かはマレー氏の捕虜生活において重要な要素となる。

1942年2月22日 日曜

今日はひどい経験をした。日本時間と僕たちの時間が違うのでミサに参加できなかった。収容所は日本時間で運営されているので僕らの時間と1時間半違う・・・僕の隊は解散して将校や兵士たちは収容所のあちこちに散らばった。

¹²⁾ <https://www.thebelfastdoctor.info/pow-diary> これ以降日記部分は全てここからの引用。

この後数日は持病のリウマチの症状のため入院して「アイルランド人の医師」に出会い、退院後收容所内の医官が居住する区域に移動すると、3月1日には3人のアイルランド人に会ったと記録している。国としては中立の立場だったアイルランドだが、国民は様々な形で戦争にかかわっていたことがうかがえる。しばしば居住区域を移動したことや、与えられた食事の内容も記されているが、米中心の食事が続きそれが苦痛だったことがわかる。この点は日本の捕虜の取り扱いの諸問題のなかでも議論を呼ぶものである。

1942年3月3日 火曜

今日はまた移動。今回は医療班の居住区だ。50人が2つの狭い部屋に入れられたけど楽しいよ。食事以外はね。ほとんど米だけ、でも僕は米が好きだから良かったね！水は一日に瓶一本だけしか許されていない。

翌日には水泳に出かけた先でバーク（Bourke）神父に偶然出会い、この神父の導きで礼拝堂を「ようやく見つけた」との記述がある。こうして礼拝に頻繁に通えるようになり、5日には「3回のミサと聖体拝領を受け」「とてもうれしかったし慰められた。慰めをお与えくださるのは神様だけだ」と記している。また「バーク神父、ウィーラン神父とイエズス会の神父」の3人の神父がいて、バーク神父の母はマレー氏と同じベルファスト出身、他の2人の神父はアイルランド出身だと記している。

この月はミサに頻繁に参加できて「捕虜にしては何という贅沢」と宗教の自由は比較的保たれていた様子がわかる。3月9日にはまた居住区を移動となり、対戦車連隊の医官となる。この新しい居住区では礼拝堂がないためミサが受けられないことを嘆くが、「食事はずっと良い」とし、「僕らは鉄条網の中で暮らしている、今や全ての收容所がそうだ」と記録している。先述したようにチャンギにあったこの施設が正式な收容所となるのはこの年の4月だが、3月の時点で既に管理が厳しくなっている様子がわかる。アイルランドの祝日聖パトリックの日を17日に迎えるが「僕たちの素晴らしいアイルランドの祝日がシャムロックなしで過ぎていくなんで想像したことがなかった」。しかし常に信仰心がマレー氏を支えていたようで、数日後には「僕の十字架、イエス像、聖水は戦闘を生き延びて木製の柵に静かに乗っている」「カトリック教徒ではない将校たちは皆この美しい十字架と像をほめている」「自分がカトリック教徒であることを誇りに思う」などの記述が続く。

3月後半になると「対マラリア対策の将校」となって「午前中はその仕事に追われる」ようになる。この頃の自分たちの状況を「歴史上最も奇妙な戦争捕虜」と表現している。「自分たちで慎重に鉄条網から出ないようにし、自分たちで警備をして脱走者を出さないようにしている。日本人はほとんど見ない。食事は十分だ。理想的な環境に住んでいる。島が一番素敵で一番涼しい場所だ」。しかし「海水浴は禁止されており、以前より制限

された」生活だった。この収容所は当初捕虜たちに管理が任されていたが、正式な収容所となる日が近くなっていたこの時期、管理が厳しくなっていく様うかがえる。23日には「対マラリア対策の仕事のため鉄条網の外に出」と、以前から顔見知りの「ケネディ神父 (Father Kennedy)」¹³⁾と信者たちが「必死に」海岸で流木を拾うのを見かける。これは「自分たちのための新しい礼拝堂」を建てるため「特別な許可なしに鉄条網の外に出られるのはこの日が最後」との記述もある。

翌月には「卵なし」「朝昼晩に米」のイースターを迎える。この頃から労役に出かける兵士の記述が現れる。この月にはシンガポール市内での労役があったことが読み取れ、労役に出た兵士は市中で「本物のパンや甘いもの」「チョコレート」などを手に入れて収容所の仲間に分けていたようだ。マレー氏は11日にまた居住区を移動、マラリア対策の仕事は「とても忙しいありがたいことに結果が出ている。僕のいる収容所には赤痢患者なし、ハエもいない、蚊もほとんどいない。それに有病率が下がっている」と記録している。25日には「ある神父が顔をひっぱたかれるのを見たがひどい経験だった。僕はその時何もできなかったし神父自身にもどうしようもなかった」、29日は「日本の天皇の誕生日」なので休日などの記述もある。5月中旬には自身が赤痢にかかって入院、6月にはチャンギからシンガポール市内へ更に移動、この月初めて日本軍から給与が支払われ「2ドル」もらい、また一人一枚のカードを送ることを許されている。月末にはまた居住区を移動する。

夏の間、南アフリカからの援助物資以外に食料が乏しく、すし詰めで生活していたため8月下旬には「自分が本当に衰弱しているのに気付いた」。8月31日「僕たちは脱走を試みないことを誓う書類に署名することを正式に拒否した。日本人は我々に署名するよう迫っていた」とある。これが後に「セララン兵営事件」と呼ばれる事件の始まりである。翌日以降の日記は以下のような内容である。

1942年9月1日 火曜

僕たちは今朝パダンまで行進し日本人将校に人数を数えられた。・・・僕の付けている赤十字はあまり意味がなさそう。他の兵士と同等に扱われた。

1942年9月2日 水曜

今朝5時指揮官に起こされて、日本人が僕らをととても狭い場所に押し込めようとしていると知らされた。1万7千人を！午後2時荷造りをして出発。ダーリン、それは

¹³⁾ 日記中に「イエズス会所属」と記されているこのケネディ神父はダブリン出身のリチャード・ケネディ神父か。第155ランカシャー・ヨーマンリー部隊に志願して従軍、当時35歳。裕福な家庭の出身で父は高名な医師、弟がシンガポールで捕虜となっていた。Andy Coogan, *Tomorrow You Die: The Astonishing Survival Story of a Second World War Prisoner of the Japanese*, (Edinburgh, Mainstream Publishing, 2013) 参照。

ひどい光景だった。こんなに大勢があんな狭い場所に。衛生が大問題になるだろう。そして僕は隊の衛生担当将校にされた！

1942年9月3日 木曜

何という夜！僕らは脱走をしないと宣言する書類に署名するのを再び拒否した。僕らは文字通り折り重なって寝た。今日見たことは絶対に忘れない。筆舌に尽くしがたいものだった。まるでカルカッタのブラックホールに南北戦争を足したようなものだ。病人を病院へ運ぶことも許されない。

1942年9月4日 金曜

更なる恐怖の一日。悪臭、汚物、暑さ、密集。・・・水曜に4人が日本人に射殺された。書類に署名しないことへの報復として。医療的理由から明日署名することは少なくとも決まった。ジフテリアと赤痢が蔓延しているためだ。僕はあと一週間は待つべきだと思った。

1942年9月5日 土曜

書類に署名して今日の午後解放された。今は地獄を去って再び樂園に戻ってきた。

この出来事は8月30日に捕虜4名が脱走を試みて捕らえられたことが発端で起きた。当時の収容所長は捕虜たちに脱走しない旨の署名を求めたが捕虜の大多数は拒否し、その懲罰措置だった。この4名は処刑され、他の捕虜1万7千程は800人程度を収容する施設に詰め込まれ、食事もほとんど与えられなかった。戦後この所長は事件への関与により死刑判決を受け処刑されている。先述のジュネーヴ条約では脱走兵の処刑を認めていない。日本は1942年1月この条約を「準用」との声明を出していた。この「準用」とは国内法や現実の状況に即して条約を適用するとの意味だが、交戦国ではこれを事実上の適用と解釈し、この齟齬が戦後の戦犯裁判に至るまで影響を及ぼした¹⁴⁾。

9月以降のマレー氏の日記では自身も「労役」を科されていることがわかる。「一日中」「暑さのなかで」の労働だった。また医官としての役割もあり「日本の医療班が傷病者を本国移送のために調べに来る」ための準備をすることもあった。「多くの者が神経症にかかっている」との記述もある。10月には「強烈な暑さ」のもと将校たちが「行進させられ日本人に点呼を受ける」などの記述もあるが、特に注目すべきは17日、自身の連隊が「鉄道建設のためにバンコクへ行くことについて説明を受け、自分も一緒に行くかもしれない」との記述である。結局マレー氏は同行しなかったが、もし行っていた場合、太平洋戦争中の捕虜虐待事件のうち恐らく最もよく知られている泰緬鉄道の建設に従事

¹⁴⁾ 白戸、前掲、p.17、立川、「日本」、pp.75-6.

させられた可能性がある。この鉄道建設では連合国軍捕虜が約1万6千人、アジア人労働者が4～7万人死亡したと推定されている。

シンガポールに残ったマレー氏は新たに収容された「何千人ものジャワ人部隊」の対応に追われ、10月末に居住区を移動になった頃には「数百人の病人」がいると記録している。この頃ケネディ神父は別の部隊と日本へ移送された。またジャワからは「1500人のオランダ人」も移送されてきて増々忙しくなり、3人のオランダ軍医官と共に治療にあたっていた。翌月にはまたも居住区が変更となり、角膜炎を患って失明の危機を経験、この月の収容所の様子を「チャンギには数千人しか残っておらず自分がまだここにいることは幸運だ。タイはあまり良くない状況らしい」と記している。ケネディ神父が去ったためミサを受けられずにいたが、オーストラリア軍所属のアイルランド人神父がミサや聖体拝領を行うことになり安堵したという。食糧事情はかなり良くなったとも記されているが捕虜たちは農場を管理させられており、「毎朝鶏、鴨、小鴨の鳴き声で起こされる」「日本人が養豚場を始めるようにと200頭の豚をくれた」との記述もある。ゲール語の勉強を再開した。また将校たちの間で政治についての議論をして「アイルランド人とインド人の扱いについて英国人を酷評してやった」という。

捕虜として初めてのクリスマスはウィーラン神父による深夜ミサとミサを受け「これほど深夜ミサをありがたいと思ったことはない」と書いている。聖体拝領には100人程集まった。この日の記述の一部を引用する。

1942年 クリスマス 金曜

米なしの朝食。昨夜食堂には紙の国旗が飾られていた。アイルランド国旗がないのに気付いて大きな三色旗を塗って部屋の一番前の目立つ場所に置いた。野次が飛んだけど誰にも僕の旗を触らせなかった！・・・今朝何人かのオランダ軍将校が訪ねてきて少なくともそのうち一人がアイルランド国旗に気付いたのでうれしかった！誰かが僕をからかって僕の国旗の上に小さな赤い手を書き加えたけど、面白かったからその下にAn lámh dearg uachtar¹⁵⁾と書いてやった。・・・それから米なしの昼食。・・・軽食にはお茶（砂糖とミルク付き！）にバターとジャム付きのパン。・・・僕が鐘を大きく鳴らして始まった夕食ではローストポークと本物のクリスマス・ブディングの給仕を手伝った。夕食後もまだ僕の国旗は飾ってあった。この36時間アイルランド、アイルランド人、それとアイルランド国旗についてからかわれ通しだったけど、全部おふざけだよ。

¹⁵⁾ 'Up the Red Hand'を意味するゲール語。赤い手は元々北部アイルランド、アルスター地方の有力部族だったオニール一族を示すものでゲール文化に根差したものだだったが、北アイルランド成立以降はプロテスタント教徒の民兵組織などが使用することが多くなっている。

翌日には「現実に戻った。労役と米」、大晦日は「日本軍のために食糧報告書を作るのに忙しく」過ぎた。年が明けた元旦には再び明るい内容となっている。

1943年1月1日 金曜

新年のお祝いで忙しい一日。夜中まで焚火をたいて歌を歌い・・・それから食堂へ。皆は正面から入っていったので僕は裏口に回って様子を見ていた！二人のイングランド人が僕の三色旗を降ろすのが見えたので飛び掛かって首根っこを捕まえてやった。テーブルや椅子の上で大乱闘になったけど、最後には僕が二人のイングランド人を両脇に抱えていた。イングランド人に対する大勝利だ！全部冗談だよ！それからよじ登ってユニオンジャックを引きはがした！

この月には「オランダ人はバンコクへ行く」「新たに900人のオランダ人が到着予定」などオランダ軍に関する記述が多く、それに伴い医官としての仕事が増えている様子である。「チフスと赤痢対策として各人に2つの予防接種を2回ずつ」打ち、ある日には通常の診察の後80人に接種を行っている。自分の予防接種は自分で打っていた。それでも赤痢やアメーバ赤痢が発生しており、「ネズミが僕のキリスト像を食べている」という記述からも、引き続き不衛生な環境にあったことがわかる。またオーストラリア軍所属のドーラン (Dolan)、ロジャーズ (Rodgers)、セクストン (Sexton) という3人のアイランド人神父が捕虜の作った礼拝堂に来てくれることになったことも書かれている¹⁶⁾。

2月になると「腸チフスの予防接種」を受け、13日に「日本軍の撮影用に2万人が行進」、19日には再度居住区を移動している。この月の後半からは労役に関する記述が増える。「太陽の下で3時間鎖につながれて」「2台の重い牽引車を引いた」翌日には「手足に水ぶくれ、背中も焼けて水ぶくれ」ができた。また翌月にかけては木材の伐採と運搬、井戸掘りが続き、そのためにできた水ぶくれがひどくなって労役を休まねばならない日もあった。3月13日には「午後軍法会議に出席。僕の証言で捕虜が無罪になった。英国国教会の聖書に宣誓するのは拒否した！聖書なしの宣誓をした」との記録がある。聖パトリックの日には「一日中シャムロックを身に着け」、月末に捕虜になって初めて婚約者アイリーンからの手紙を受け取っている。郵便事情の悪さに加えて日本軍による検閲もあって捕虜に宛てた郵便は届くまでにかなりの日数がかかった。前年7～8月に出された手紙をこの年4月に受け取っている。なおマレー氏は捕虜になった日の朝、日本軍に没収されるのを恐れてそれまでに受け取っていたアイリーンからの手紙を全て焼却している。

俘虜情報局の記録によると、この時期シンガポール領内の収容所にいた捕虜に科され

¹⁶⁾ この3人の神父に関するものと思われる記事は以下を参照。http://military.catholic.org.au/australian-8th-division-in-changi-priso/

ていた労役は「土木、荷役、工業、部隊派遣」となっており、マレー氏が就いていたのは土木と考えられる。この年この土木作業に使用されたのは延べ61973人と記録されている¹⁷⁾。捕虜の労働自体はジュネーブ条約でも認められているが、これより前の1911年に日本も批准していたハーグ陸戦条約（1899年採択、1907年改定、1941年の俘虜情報局設置はこの条約に基づく）では将校を労務者として使用することや傷病者の就労、過度の労働、軍の作戦に関係する就労は禁じている。しかし日本は1942年5月の「俘虜処理要領」と翌年5月の「俘虜労務規則」で将校の「発意」による就労や軍事作戦に関係する労務を可能にした。これに先立つ1942年2月の「俘虜給与規則」では捕虜となった将校には日本陸軍と同等の給与を支給すること、准士官以下には給与はないが陸軍の基準を基に収容所長の判断で食糧を支給することが定められたが、戦況の悪化により給与や食料、衣料品、医薬品等の支給状況は悪化していった¹⁸⁾。

4月末になるとこの日記に初めて日本語「Tenno Heika（天皇陛下）」が使われている。29日の天皇誕生日の記述である。この頃には6千人程残っていたうちの3千人が移送され、5月11日には自身も900人と共に日本移送となることを伝えられるが、その中にはオマホニー神父も含まれていた。15日夜には「急な命令」で一つの船倉に382人が詰め込まれて出航となったが、翌日この出航を「衝撃の夜」と表現している。マレー氏が乗船したのはウェールズ丸で「外の3隻と共に船団を組んでサイゴンへ」向かった。19日にはサイゴンに停泊するが「ネズミみたいな生活で何とか生きている」状態にあり「赤痢の患者」が出ていた。この「不潔な貨物船」「ブラックホール」はサイゴンに5日程停泊して再び出航、台湾経由で日本を目指すが、この時は20隻の船団となっていた。6日後に台湾に着くまでは「毎日20分デッキに出ること」を許されるが、この間にオマホニー神父が体調を崩し、他にも病人が発生するものの「治療用具は何も」なかった。台湾の高雄に停泊中は「自分たちで3本ずつバナナを買って食べ」「日本の医官の面接を受け医薬品の支給を約束してもらった」。4日後の6月2日には高雄を出航、7日門司に到着する。なお移送中に死亡した捕虜は終戦までに1万人以上いたと推定されている。これは病気その他連合国側からの攻撃を受けたためである¹⁹⁾。

5. 1943年6月日本到着、函館

1943年6月7日 月曜

今朝門司に到着。健診をうけ午後日本の土を踏む。整列して人数確認と再確認。フェリーで瀬戸内海を渡る。装具を運ぶのに一苦労した後9時半に列車へ。2等車でぎゅうぎゅう詰めだが座れた。

¹⁷⁾ 茶園、『俘虜情報局』、p.32。

¹⁸⁾ 白戸、前掲、p.24、立川、「日本」、p.82-5。

¹⁹⁾ 立川京一「旧軍における捕虜の取扱い―太平洋戦争の状況を中心に」『防衛研究所紀要』（10巻1号、防衛研究所、2007）、pp.102-3.沈没船一覧の詳細は以下。<http://www.powresearch.jp/jp/archive/ship/index.html>

1943年6月8日 木曜

ひどい夜。眠れずまっすぐ立ったまま。首が痛い。驚きの一日。工業都市の京都と神戸（オーストラリア軍はここで下車）を通過して東海岸へ。西海岸へ戻って美しい丘や谷を抜けた。段になった水田や木におおわれた森。

1943年6月9日 水曜

列車の中で再びひどい夜。眠れない。北へ向かって西海岸を走っている。美しい国だよアイリーン。君も気に入るだろう。途中には沢山トンネルがあった。普通の農民たちは良い人々だ。今日は何百もの美しい入り江を見た。神のご加護を、ダーリン。

1943年6月10日 木曜

列車でまたもつらい一日。本州の最北端にいる。学校で何時間も待たされた。そこに着くまで町の中を行進しなければならなかった。道の両側では群衆が僕らを笑っていた。朝5時半フェリーに乗って4時間で北の島に着いた。函館。1時間行進して深夜収容所に到着。やっと終わってありがたい。

1943年6月11日 金曜

一日中病人の対応。5時半に起床。点呼。地面の上で一晩過ごす。ここで見た英国空軍隊員たちの姿は表現できない。骸骨のような人間が沢山。

1943年6月12日 土曜

忙しい一日。朝5時半から夜9時まで一日中座る暇もない。でもあの気の毒な兵士たちのために自分が何かできるのはありがたい。食事は良い。ジャガイモ、野菜、魚のシチュー。景色も良い。すぐに別の収容所へ移動することになっている。

こうして「地獄船」と呼ばれた船での移送後、函館に到着した。北海道内には函館俘虜収容所が1942年12月に正式開設され、函館に本所、その下に派遣所（上磯と亀田）、分遣所（八雲）、分所（室蘭のち芦別、赤平、歌志内、西芦別）が作られた。マレー氏は最初函館の本所に到着した。輸送船の劣悪な環境、シンガポールから北海道へと気候が大きく違う場所への移動等が理由となって、日本上陸直後の死亡者数は多かった。マレー氏も13日には「多くの者が死にかけている」翌日には「結核で一人死亡」15日には「このひどい場所で疲弊する。多数の病人、多くが死に瀕している」と記録している。

6. 1943年6月～10月、八雲

捕虜の内地移入は国内で不足する労働力を補う目的だった。この方針は1942年8月に

決定しており、9月には大阪と東京に収容所を正式開設、翌月には本格的な内地移送が始まった。収容所は使役企業が新設または既存のものを使用し、人員、労務の種類、収容設備、賃金等を陸軍大臣に許可を得て決定の上、使役企業が捕虜を雇用する。こうした体制も急ぎ整えられたもので、1942年12月北海道に第一陣の捕虜が到着した時、収容施設はまだ工事中だった。マレー氏が送られた八雲分遣所は移送された当日が開設日で、この分遣所が閉鎖される10月25日までここで過ごした。労務派遣先は陸軍八雲飛行場建設工事場だった。開設日の6月16日の日記には「大工たちが小屋を宿舎に建て替えている間一日中外で座っていた」と記されている。翌日にはオマホニー神父と再会、「多くの病人、肺炎一人」の記述がある。この月には肺炎の記述が多く「ひどい寒さだが温かい服がない」、雨が多く「宿舎が沼地のように」という住環境の悪さも一因だろう。「医薬品なし」「病人を入院させることを日本人が拒否」といった状況で、与えられたのは牛乳だけだった。他に敗血症、赤痢の患者もあり、6月末には自身も「いつも冷たい食事で下痢症状」にあり「屋外に屋根のないトイレ」があるせいで「何百万もの蠅」に悩まされた。早朝から深夜まで医官として働き続け、病人用の牛乳を日本の衛生兵と共に近くの農場へもらいに行くこともあり、この「皆に良くしてくれた」衛生兵が10日程で収容所を去った時にはマレー氏の名前や住所を書き止めたという。翌月になってもジフテリアなどの患者が発生し、完全な報告書を日本軍の「クドー氏」に提出するよう求められている。この人物は八雲分遣所長の工藤貞二郎中尉と思われる²⁰⁾。「日本人とのパーティー」が開かれた日もあり「風変わりだった。とても低い机に靴下で座ってワインをすすり喫煙。やって来た日本人が戦争について講釈していた（日本語で）」。「通りの向こうの収容所（朝鮮人用）で芸者が踊っているのを見た。妙な歌も歌っていた。髪型と着物は美しかった」という記述もある。

7月12日になると「誰が労役に出るかを僕ではなく日本人が決めることになった。今や病人たちが仕事に行かされているが彼らはほとんど歩けない」とあり、ハーグ条約に明らかに違反した状態だったことがわかる。7月下旬になると初めて「yasume」の表記が現れる。これ以降主に日曜や祝日をこの様に表現しているが「休み」「休む」ではなく「休め」と命令形なのが捕虜の置かれた立場を物語る。この頃にはマレー氏も「穴掘り」の労役に出ていたようで、これは飛行場建設のためと思われる。休日には海水浴を許されており「浜から1マイル程泳いだ」時には「日本人たちが驚いた」。また「子供たちが僕の泳ぎを見に来た」こともあった。8月上旬になると「重病者はいなく」なっている。また捕虜担当の「将軍」にも面会しており、マレー氏が捕虜と日本側との交渉役であったこともうかがえる。オマホニー神父の尽力によりミサは開かれていたが「隔週日曜」のみに限定されていた。下旬になっても「まだ地面の上で寝ている。机も椅子もない」とあり、ベッドや椅子のない生活は苦痛だったようだが、日本側がこれを問題だ

²⁰⁾ 白戸、前掲、p.74.

と気付いていたかは不明だ。食事は「改善され、毎食新ジャガを食べている」とある。

9月になると「日中は何百万もの蠅、夜は蚊。一日中下痢。足元がおぼつかない」と自身も衰弱、寒くなり始めていたが「シャツと短パン」しかなかった。「ブーツもないのに雨の中労役に出る兵を見て「心が痛む」とも記している。10月には「タイではなく日本の収容所で良かった」との記述があるので、タイの収容所や鉄道建設での過酷な状況を何らかの方法で知っていたことになる。降雪の時期となり分遣所は10月25日に閉鎖され、室蘭分所への移動を命じられる。最後まで机や椅子はなく「床の上で食事をするのは惨め」と苦痛を記している。この分遣所で死亡した捕虜は一名だった。

7. 1943年10月～1945年6月、室蘭

室蘭分所は1942年12月開設、翌年1月に使役企業の日本製鉄輪西製鉄所の敷地内に移設された。ここには「オランダ軍350人英国軍370人」がいたが両軍の医官の中でマレー氏の階級が一番上だったため医療班の指揮官となり、到着直後から日本軍将校やスウェーデン公使による視察などに対応している。ここでは「電気とベッド」があり医務室もあった。食事も良く体重が「八雲時代より13キロ増えて81キロ」になり「前より良い50円」の給料を受け取っている。しかしこの収容所の死者は多く、終戦までに53名とされている。マレー氏が到着したこの年だけで38名の死者を出した²¹⁾。日記にも「昨日急に一人死亡して気が滅入る」「水痘」「肺炎」などの記述が続く。また「オランダ将校が殴られて鼻血」など暴力がふるわれていたこともわかり「司令官に抗議」したとある。日本人医師が診察に来れば病人の「ほとんどを労役に出すよう求めた」。またマレー氏自身も将校だが炭鉱での労役に就いている。こうして「人生最悪のクリスマス」を迎えた。オマホニー神父のミサは時々受けることができ、大晦日には捕虜たちで作った新しい礼拝堂を神父が「雪の聖母礼拝堂」と名付ける予定だと記している。

新年は元日に行進の後「皇居の方を向く」よう命じられて始まった。マレー氏は「骨髄炎」「ヒステリー」等種々の患者を診ながら炭鉱での労役にも出ている。炭鉱では日本人労働者の間に「大きな不満」が広がっており「彼らは英国は上等だと言っていた」。捕虜が死亡すると火葬場へ付き添った。その時日本人の葬儀を見たのだろうか。火葬場を「風変りな場所。鐘が鳴る。衣装を着た仏教僧が歌う。何千人もの参列者が僕を凝視していた。まるでおかしなものでも見る様に」と描写している。2月になるとオマホニー神父が移動となり、「終戦までミサがないかもしれない」と心配しながらも「僕は病気になれない。多くが僕を頼りにしている」「医者には僕の天職だろう」と医師としての決意を記し、労役も「免除されているが他の将校もやっているからできる時には僕もやる。自分の役割を果たしたい」としている。月末には他の将校の転出によりマレー氏の階級が最高位となり、以降捕虜全376人の指揮官となる。

²¹⁾ 死者数はPOW研究会による。http://www.powresearch.jp/jp/archive/powlist/camplink.html

1944年で特筆すべきは3月、北海道の捕虜収容所全てを治める函館俘虜収容所長に江本茂夫中佐(1888-1966)が就いたことだ。1943年末からこの頃までの日記には、終戦後の戦犯裁判で被告となる日本人3人の名が現れる。つまりこの時期に捕虜への加虐行為があったということだ。しかし江本就任の頃「扱いがずっと良くなった」。14日江本は初めて室蘭分所を視察すると「我々4人の将校に2時間完璧な英語で語った。彼は日本女性が世界一だと宣言した。僕は勇敢にもアイルランド女性が世界一だと反論した」。この江本は陸軍士官学校から東京外国語学校に進み香港に留学、軍務の後横浜専門学校で英語科主任教授となっていた。英語が流暢で欧米文化にも詳しく江本は、仕草等慣習の違いから生じる誤解によって捕虜が殴打されるのを東京で目撃し、国際法に基づいた捕虜の取り扱いの必要性を感じて収容所長に志願したという²²⁾。江本は「収容所にいる全員と面接、全ての要求を許可」した。月に3日の休日、パンと砂糖の配給等が許され、マレー氏は江本を「瞬時に実行に移す」人物と評した。5月には江本着任以降の日々を「忘れることはないだろう」と記している²³⁾。

それでも治療がままならず「結核」「直腸出血」で死者が出ており、また夏以降は収容所内に防空壕を掘る作業も加わった。この頃「まだ正気を保っている。毎晩仕事から体を引きずって戻ってくる衰弱し飢えた哀れな仲間を見たら君の心は痛むだろう」と書いている。7月17～21日の記述が日記全体を通して最も長く、この時期が精神的に最も苦しかったのではないかと思われる。指揮官として食事や給与の分配といった仕事も加わっていた。それでも「落ち込むわけにはいかない。仲間のためには明るくなくては」と誓い、「将校には快適な収容所だが下級兵には地獄だ」と常に他を思いやっている。

この年の日記にはマレー氏と江本との面会が9回記録されている。大抵数時間に及んだ。8月5日「私は再び病人の件を訴えた。彼は病人と衰弱している者は労役に出すなど言った。これは僕にとって素晴らしい成果だった。どんな犠牲を払ったとしても」とあり、11月3日には「彼がしてくれたことに我々がどんなに感謝しているか伝えた」。12月6日には「クリスマスに日本のカトリック神父が来てくれるよう頼んだ」。すると23日午後には「とても魅力的で小柄な」「日本人神父」がやって来て、25日には「ほぼ一年ぶりにミサと聖体拝領を受け」「この喜びが想像できる？」と綴っている²⁴⁾。また江本の指揮下にあった時期には「卓球」「バレーボール」を楽しみ、外出を許された。ある日の日記には「輝かしい日光の下2時間日光浴をして歌っていた」捕虜たちの様子を見て

²²⁾ 白戸、前掲、pp.123-4、立川「旧軍」、p.115、川口好高「捕虜収容所長江本茂夫中佐」『神奈川大学紀要』(2号、2017) pp.19-38、河野通「語学将校陸軍中佐江本茂夫: 軍人として教師として」『東京家政大学研究紀要』(33巻、1993)、pp.1-18。

²³⁾ ボール・マレー氏(カールの兄)は2017年来日、父が捕虜生活を送った北海道を訪ねた。訪問の目的の一つは江本の親族に会って「お礼を言う」ことだったが、かなわなかった。しかし父を覚えている地元住民に出会った。POW研究会「2018年5月会報」より。同研究会笹本妙子氏のご協力に感謝します。

²⁴⁾ カトリック室蘭教会の小林薫司祭によるとこの神父は当時室蘭教会の主任司祭だった児玉三男神父(1914-47)ではないかのこと。小林司祭のご協力に感謝します。

地元住民は「僕たちの気が狂ったと思ったらしい」とあり、移送される捕虜の見送りに駅へ出かけた時には、「混雑した駅で僕らは地元の人々の興味の対象だった。小人の国のガリバーみたいに」などユーモアも忘れなかった。一方で戦時下の日本の様子も鋭くとらえられており、室蘭について「大きな町だが空っぽだ。人々には楽しみがないのだ。軍服を着た若い少年たちで公園は一杯で、彼らがあんなに若い時から厳しく統制されているのを見るのは悲しい」という記述がある。

8月3日マレー氏はオランダ軍医師と共に日本軍司令官立ち合いの下日本の報道機関2つの取材を受けた。「英国兵の悲惨な状況、ひどい食事と過酷な労役について散々話した。彼らは憤慨していたが僕は務めを果たしたのだ。中佐が着任する以前のひどい暴力とそれ以降の改善についても話した。この代償は大きいかもしれないが、やらねばならぬことだった」。これが原因なのかこの日以降別の収容所への移送をほのめかされたり故郷からの手紙を渡してもらえなかったりという出来事が続いた。それでも「特に弱者たちのために」「自分の仕事と務めを果たしたのだから気にならない」とある。この時期以降の日記からはマレー氏の指揮官としての使命感が一層強く伝わってくる。一方江本は1945年5月に所長の職を解かれる。捕虜への厚遇が原因だとされているが、実際この年2月20日の日記には「捕虜係の中将が訪問して収容所が捕虜に甘すぎると糾弾した」とあり、恐らく江本のことと思われる「かわいそうな父さん」は「視察の間ひどい目にあって面目を失った」。江本退任の挨拶が収容所で代読されると「沈鬱な」雰囲気になったという。挨拶は「戦争が終わったら友人として皆に会いたい」という内容だった。北海道内の収容所で終戦までに死亡した捕虜は174名とされるが、江本在任中の死者は3名のみと考えられる²⁵⁾。一方当時の捕虜情報局長官だったこの中将は戦後、戦犯として有罪判決を受けることになる。

さて日記にゲール語の表記が現れるのもこの頃である。これらは主にヨーロッパの戦況について言及する際に使われている。持ち物を点検され万一日記が見つかってもしゲール語で書いてあれば日本人には内容がわからないだろうと考えてのことだろう。6月8日が最初の機会第2戦線をAn 2adh araidhと記している。ノルマンディー上陸作戦に言及しているのだが、実際の作戦決行からわずか2日後のことである。捕虜たちはラジオ等で情報を得ていた。翌年にはTá hanobher i lamhaibh na Sasanach (ハノーバーはイングランドの手に落ちた)、Tháinic an sgeala olc isteach indíú go bhfuair rosbhelt bás. (ルーズベルト死亡という悪い知らせが来た)の他ins an tír seo, tá an uaitharán caithte (この国の大統領<原文ママ>が失脚)と日本の首相交代もゲール語で書かれている。

江本退任の頃から収容所内の食糧事情は悪化し、日記にも空腹、飢えの言葉が目立つ。「雑穀と米の混ざったもの」等を食べた。これは終戦間際の日本の食糧事情によるとこ

²⁵⁾ POW研究会<http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplist/index.html#hakodate>

ろもあるのだろう。

8. 1945年6月～終戦、芦別、歌志内、赤平

マレー氏はその後1945年6月5日に開設2日前の芦別分所（使役企業三井鉱山芦別鉱業所）、26日にはやはり開設前の歌志内分所（使役企業北海道炭鉱空知鉱業所）、7月7日には開所して1か月の赤平分所（使役企業住友鉱業赤平鉱業所）に移動となってここで終戦を迎える。芦別への移動は「カオス」で収容所はまだ建設中だった。ここでは「病人を労役に出させる分所長と口論」となるなど病人を働かせる日本人への怒りを露わにしている。また歌志内は「悪臭がする谷底にあるひどい場所」で160人ほどの捕虜が「鯛の様に詰め込まれて」いた。ここでは度々捕虜が殴られるのを目撃してそれを止めに入っている。赤平には281人の捕虜がいたが食糧事情はここでも悪く、マレー氏自身も「一月で4キロやせた」。兵は鉱山へ長時間の夜間労働に行かされた。「病人が鉱山で働かされるのを見るのはつらい」とあり、鉱山でけがをした捕虜に頻繁に手当てをしている。赤十字から送られた医薬品は日本の医師が管理していたことも記されている。7月14日には北海道が初めて空襲を受け「一日中兵舎に座っていた」が捕虜の「士気は高く、翌日も空襲のため兵舎にいたが「これは価値のあることで全く苦痛ではなかった。ついに米軍がやって来たのではないか」としている。これ以降「楽観的」「終わりは遠くないはず」等の記述があり、ついに終戦を迎える。その日の日記である。

天皇が正午に演説をした。これは大ごとだ。フランシス大尉と僕は事務所に呼ばれ、鉱山の仕事は終了と言われた。チフスが蔓延しているからだと言われた。もちろん嘘だ！ダーリン、僕の診断では戦争が終わった！もしそうなら何て良い知らせだろう。鉱山労働者たちも同じ知らせを持って帰った。街灯がついている。空襲警報もない。蓄音機は日に6時間。新しい図書室とゲーム。将校用の新しい食堂！

翌日には「看守が終戦を認め」たものの確証がなく、21日になって「終戦を確認」している。24日には江本が赤平を訪れ「大歓迎を受けた」。江本の訪問は終戦確認後、捕虜の間で脱走や抗議活動が起きており、それを治めるためのものだったとされる。マレー氏は江本らと「沢山のビールと米なしの昼食」を取った。翌日「日本人が自分に土下座するのを見るのは嫌だった」と記している。以降赤十字の援助物資により生活環境は改善し、米空軍による物資の投下も始まった。この投下物資に当たって地上にいた朝鮮人女性が死亡、他にもけが人がいたことも記している。月末には収容所外に出ることも許され様々なスポーツを楽しんだ。それを見て「地元の住民は大喜びだった。チューイングガムをあげた子供たちは皆うれしかった」。

赤平から「日本人職員と看守が去り、もう捕虜ではないと言われ」た9月2日には再び西芦別に戻って指揮を執る。そこに残っていた捕虜たちに解放の日まで「騒ぎを起こさないように」と命じた。7日には札幌へ行き「署名をして収容所を公式に引き継いだ」。その後「中国人収容所へ行った」とあるが、これはこの年6月に「本所」となった三井美唄鉱業所内にあった中国人労働者の収容所のことと思われる。終戦後も「外部の情報完全に遮断され」ており、労働者たちはようやく「英軍捕虜たちにより解放され」²⁶⁾たのだった。マレー氏はここで「患者全員を診察して薬を届けると約束」、実際翌日には「衣類、たばこ、甘いもの等を持って」訪れ「大歓迎を受けた」。その後も連日訪問し、千歳飛行場から横浜へ飛び立つ前日の12日にも中国人用の病院を訪ね「できるだけのことをして収容所に急ぎ戻った。それから英国軍のコート、我々が保管していた全ての食糧（米等）を中国人に渡した。日本人は激怒して自分たちの職員用に靴下一組を懇願した」とある。マレー氏が横浜へ移動したのは13日だった。

9. 最後に

マレー氏は横浜から沖縄、マニラ、カナダのヴィクトリアを経て11月18日イングランドのサウサンプトンに到着する。捕虜だった3年半の間書き続けた日記はカナダで投函、無事婚約者の元に届いた。そして家族によって保管されていたおかげで今、貴重な資料として我々が読むことができる。婚約者のアイリーンとは翌年2月に結婚、軍を辞めてベルファストで開業医となった。北アイルランド紛争が激化していた1972年3月、自身の病院が放火で破壊されたため2年後には引退を余儀なくされた。シンガポールの捕虜収容所では「おふざけ」で済んだ宗派や帰属意識の違いこそがこの紛争の争点だった。1990年代初めに心臓手術を受けて入院したマレー氏は、病院のベッドの列を見て捕虜時代を思い出し、悪夢を見るようになった。その後入院前の状態に戻ることはなかったそうだ。1993年に亡くなっている。

この日記を読み終えて思い起こされるのはナチスの収容所に入れられていたV・E・フランクルの体験記『夜と霧』（1946）だ。フランクルは収容所という絶望的な場所で生き残るのは「生きる目的」を持つ者だと言う。マレー氏には婚約者への愛情、信仰心、医師としての使命、そして恐らくはアイルランド人としての誇りがあった。医官かつ指揮官としての経験が深まるにつれ使命感は強まり、その献身ぶりは終戦後9月7日に他の捕虜たちから送られた感謝状からも伝わる²⁷⁾。先述の通り日記の記述が最も長くなっていた1944年夏、日記の他に「今日私が考えたこと」という文章も残している²⁸⁾。ここに書かれた内容は、捕らわれの身であること、日本社会について、の卓越した考察となっ

²⁶⁾ 白戸、前掲、pp.249-50.

²⁷⁾ <https://www.thebelfastdoctor.info/pow-testimonial>

²⁸⁾ <https://www.thebelfastdoctor.info/pow-i-thought-today>

ている。これを掲載して本稿の終わりとしたい。日本軍の捕虜としての経験を記した手記等は他にもいくつか出版されているが、それらに比してもこの部分を読むだけでもマレー氏の洞察力の鋭さがわかるだろう。「軍は国民の一部」であり「一国民の具有する全ての性質はそのまま軍の性質に反映するはずである」²⁹⁾という言葉が正しいのならば、暴力の是認、弱者への加虐、「準用」という曖昧な言葉で政策を進める、といった捕虜取り扱いにおける問題点は、戦後今日までの日本社会にも受け継がれた課題である。戦時中も現在でも公文書は国民の財産であるという認識が薄く、いとも簡単に破棄される国にあっては、このような個人の残した資料は貴重である。

1944年8月11日

全ての人間は人生の一時期を捕虜として過ごすべきだ。私は多くを学んだ。私の経験から得られるものがありますように。人生における全ての些細なもの、いつも当たり前と思ってきたこと、の本当の価値を知った一良い家庭、善良な両親、兄弟姉妹、友人、そして愛する君。これらを持つことは贅沢なのだとい前は気付いていなかった。自制心を学んだ、特に言葉の面で。人を傷付けるのは本当に簡単だ。不機嫌にならず嫌味を言わないことを学んだ。人に干渉せず、神の意思に完全に委ねることを教わった。心身共に苦痛がある時もそれを見せず他人にも転嫁しない術を学んだ。苦痛を他人に転嫁するのは全くの不正義だ。謙虚さも学んだが弱者へのいじめに対する戦いでは私は容赦しない。私は弱者に常に同情する。彼らには庇護者がいない。非常に不愉快な人々の近くで生活することも学んだ。彼らの様々なことにひどく悩まされたが私はそれを克服した。こんな変化が可能だとは信じていなかった。嫌いな人を避けるのが以前の私のやり方だった。なぜなら彼らに愛想良くしようとするのは偽善だと考えたからだ。私はここから生きて帰ると固く決心しているが、それは他人の欠点に乗じたものであってはならない。

1944年8月12日

自由とは素晴らしい目標だ。思想、発言、行動の自由。自由の欠如が人に何をもたらすかを実際に見るまでは、自由がもたらす幸福を誰も理解できない。私はこの国を少なからず知っている一人々は奴隷である。彼らには何らの自由もなく魂もない。彼らは政府の所有物で不幸な民族だ。数人が大多数を強権的手法で統治している。普通の人々は善良だ。農民は質素で親切な人々だ。しかし軍部に率いられると残忍で残虐になる。彼らの生活には何も楽しみがない。日本では女性は全ての点で男性よりずっと虐げられている。独裁と圧政は憎むべきものであるのに彼らは奇妙な哲学でそれらを受け入れている。それらが愛国心を装っているから彼らは受け入れる。

²⁹⁾ ハンス・フォン・ゼクトの言葉、半藤一利他『「BC級裁判」を読む』（日本経済新聞社、2010）、p.7に引用。

彼らの宗教が上から言われたことは受け入れろと教えているのも理由だ。イングランドで私が経験した自由は素晴らしかった。発言の自由、宗教の自由、全てが自由で気楽だった。「イングランド人の家は彼の城」である。誰も彼に干渉しない。隣人のすることに誰も興味を持たない。自由とは全く戦うに値するものだ。ポーランド人はそう考えた。アイルランド人もそうだ。1939年にイングランドの自由が脅かされ、彼らはそれを維持しようと今も戦っている。彼らが他者にももっと自由を与えることを神に祈る。彼らが命を賭して守っているその自由を。天に両腕を伸ばし、アイルランドの丘から限らない空を見上げてあの言葉を叫びたい、「自由」!

(本学非常勤講師)